

## 他者からの拒絶が関係形成行動に及ぼす影響

岡田 涼<sup>1)</sup>

### 問題と目的

他者から拒絶されることは、非常に否定的な出来事として経験される。仲のよかった友人から無視されたり、仲間グループへの参加が拒まれたりすることは、誰にとっても嫌悪的な経験である。このような嫌悪的な経験である拒絶に対して、人はどのように反応するのだろうか。

近年、実験社会心理学的な立場から、拒絶がもたらす影響を明らかにしようとする研究が蓄積されている。その中で、拒絶を経験した場合に、人は他者とのつながりを回復しようとすることを示す研究がある。例えば、Maner, DeWall, Baumeister, & Schaller (2007) は、他者からの拒絶が新たな関係を形成しようとする動機づけを促すという社会的再結合仮説 (social reconnection hypothesis) を立て、6つの実験によって検討している。その結果、他者からの拒絶を経験した参加者は、新たな友人関係を形成する機会に興味を示し、単独の作業よりも共同的な作業を好み、他者を好意的に評価し、他者に報酬を多く分配していた。これらの知見は、社会的再結合仮説に合致するものである。他にも、他者からの拒絶を経験した場合に、同調行動が増加したり (Williams, Cheung, & Choi, 2000)、社会的事象に対する記憶再生が高まることが報告されている (Gardner, Pickett, & Brewer, 2000)。これらの知見から、拒絶を経験することで、新たな関係を形成しようとする動機づけが高まると考えられる。

拒絶が関係形成に対する動機づけを促す背景には、自尊心の低下を想定することができる。ソシオメーター理論 (sociometer theory: Leary, Tambor, Terdal, & Downs, 1995) では、他者からの受容—拒絶を感知するためのソシオメーターとして自尊心の機能を捉えている。原始社会においては、集団への所属が生存や生殖にとって不可

欠であったため、人は進化の過程で他者からの受容—拒絶を感知する心的装置として自尊心を発達させた。他者からの受容—拒絶に伴って自尊心が変動することで、自身が拒絶されていないかどうかを知ることができる。これまで、多くの実証研究で拒絶が自尊心を低下させることが示されてきた (Leary & Baumeister, 2000)。Leary et al. (1995) は、実験場面において、他者からグループのメンバーとして選択されるか否かによって受容—拒絶を操作している。その結果、受容された場合には自尊心が高まり、拒絶された場合には自尊心が低下していた。また、Srivastava & Beer (2005) は、縦断調査によって、自尊心は他者からの好意を予測せず、他者からの好意が自尊心を予測することを明らかにしている。他者からの拒絶を経験した場合には、自尊心が低下することで自身が拒絶されていることを知り、その回復のために新たな関係を形成しようとする動機づけられるのであると考えられる。

以上のことから、他者から拒絶された場合に、自尊心が低下することで関係形成に動機づけられるというプロセスを想定することができる。しかし、次の2点については十分検討がなされていない。1つ目に、上述の研究では、関係形成しようとする行動ではなく、その前段階としての動機づけのみに焦点をあてている。友人関係を形成する機会に興味を示したり、他者を好意的に認知することは、新たな関係の形成を志向する動機づけとして考えることができるものの、それ自体が他者に働きかけるか否かという行動面での意思決定ではない。拒絶が自尊心の低下を介して関係形成を行うというプロセスを明らかにするためには、自ら他者に働きかけるか否かという行動面での意思決定を扱う必要がある。

2つ目に、拒絶によって高まる動機づけのタイプが弁別されていない。社会的関係に対する動機を捉える視点として、接近—回避の次元に注目する立場がある (Frank & Brandstätter, 2002; Gable & Strachman, 2007)。接近動機 (approach motive) は肯定的な結果を得ることを目標とする動機であり、他者との関係に伴うメリッ

1) 日本学術振興会・名古屋大学大学院教育発達科学研究科

トを追求するものである。一方、回避動機 (avoidance motive) は否定的な結果を避けることを目標とする動機であり、対人関係をもたないことで生じるデメリットを低減させようとするものである。これらの動機は、それぞれ異なる結果をもたらすことが知られている。Gable (2006) は、拒否不安や回避目標などの回避的な動機が、対人関係面での満足感を低め、不安や孤独感を高めることを明らかにしている。また、Elliot, Gable, & Mapes (2006) は、友人関係場面における回避目標がネガティブな出来事の多さと関連することを報告している。もし拒絶によって生じる行動が回避動機によるものであれば、新たに関係を形成しようとする試みは必ずしも成功せず、逆に不安や孤独感を強める可能性がある。

本研究では、他者からの拒絶が自尊心の低下を介して関係を形成しようとする行動 (以下、「関係形成行動」とする) を促すプロセスについて、その際の動機を弁別したうえで検討する。拒絶の効果を検討する際、方法論上の問題点が2つある。1つ目は、拒絶をどのように操作するかである。拒絶の操作方法としては、他者からの選択、ボール・トス、パーソナリティ・テストに関するフィードバックなど様々なものがある (岡田・中山, 2008)。その中で、本研究ではプライミングによる方法を採用する。Sommer & Baumeister (2002) は、拒絶に関する単語や文章をプライミングすることで、拒絶の心理状態に誘導している。プライミングによる操作方法は、実際の他者をもつ特徴の影響を統制したうえで、拒絶の心理状態に誘導することを可能にするものと考えられる。2つ目に、拒絶と否定的出来事との交絡である。他者からの拒絶は、否定的出来事の一つであるため、拒絶の効果がみられたとしても、それが拒絶という現象に独自の効果なのか、否定的出来事全般によって生じる効果なのかを弁別できない。そこで、本研究では、対人関係に関わらない肯定的出来事と否定的出来事をプライミングする条件を加える。拒絶が関係形成行動に対して独自の効果をもつのであれば、ネガティブ感情については拒絶条件と否定的出来事条件で差がみられず、関係形成行動については差がみられると予想される。

## 方法

### 実施時期

2008年5月。

### 要因計画

プライミング (受容, 肯定的出来事, 拒絶, 否定的出来事) の1要因計画。

### 実験参加者

大学生および大学院生148名に実験参加を依頼した。

欠損値のみられた回答者を除き、受容条件36名 (男性18名, 女性18名), 肯定的出来事条件36名 (男性16名, 女性20名), 拒絶条件35名 (男性15名, 女性20名), 否定的出来事35名 (男性20名, 女性15名) の合計142名 (男性69名, 女性73名) を分析対象とした (平均年齢20.46歳,  $SD=3.21$ )。

### 手続き

質問紙実験の形式で、講義時間を利用して一斉に行った。いずれかの条件にあたる質問紙をランダムに配布した。最初の頁では、プライミングによる実験条件の操作を行った。教示に従って、出来事の順位付け課題を行うことを求めた。2頁目では、操作チェック項目と現時点での感情状態を尋ねた。3頁目では、状態の自尊心を測定した。4頁目では、仮想場面における関係形成行動とその動機を測定した。なお、表紙には回答が匿名であること、回答をやめたらいつでもやめてよいことを明記した。実験終了後に、デブリーフィングとして実験の概要を記した資料を配布した。

### 条件操作

条件ごとに10個の架空の出来事を提示し、それらをよく読んだうえで、受容条件と肯定的出来事条件では“今後自分に起こったら嬉しいと思う順”に、拒絶条件と否定的出来事条件では“今後自分に起こったら嫌だと思う順”に3位まで選択させた。受容条件の出来事は、「しばらく連絡がなかった友人から連絡がくる」「友だちと深い話をしてわかりあえる」など、すべて他者からの受容や関係の良好さに関する出来事であった。肯定的出来事条件の出来事は、「試験、レポートでよい成績をとる」「前から欲しかったものが手に入る」など、すべて対人関係と関わない達成や物質的な獲得に関する出来事であった。拒絶条件の出来事は、「仲のよい友人から避けられる」「友人などのグループで自分だけ仲間外れにされる」など、他者からの拒絶や対人関係の悪化に関する出来事であった。否定的出来事条件の出来事は、「災害や交通事故に遭う」「授業についていけなくなる」など、対人関係に関わらない失敗や被害に関する出来事であった。

### 尺度

操作チェック 「人から受け入れられた」「人から拒絶された」「孤独な」「人から認められた」の4項目を用いた。各項目について、“まったくあてはまらない”から“非常によくあてはまる”の6件法で回答を求めた。

感情状態 Watson, Clark, & Tellegen (1988) による PANAS 日本語版 (佐藤・安田, 2001) を用いた。この尺度は、ポジティブ感情 (「活気のある」「誇らしい」など8項目) とネガティブ感情 (「心配した」「恥じた」な

ど8項目)の2下位尺度からなる。「次のようなことを、今現在どの程度感じていますか?」と教示し、回答時点での感情状態を測定した。各項目について、“まったくあてはまらない”から“非常によくあてはまる”の6件法で回答を求めた。

**状态的自尊心** 阿部・今野(2007)の状態自尊感情尺度を用いた(「いま、自分は人並みに価値のある人間であると感じる」など9項目)。「次のようなことを、今現在どの程度感じていますか?」と教示し、回答時点での自尊心を測定した。各項目について、“まったくあてはまらない”から“非常によくあてはまる”の6件法で回答を求めた。

**関係形成行動** 仮想場面で自発的に他者に話しかけるか否かの判断を関係形成行動の指標とした。仮想場面は、「あなたは大学に入ったばかりで、周りに知っている人は誰もいません。授業を受けるために教室に行き、1人で席に座っていましたが、授業が始まるまではまだ少し時間があります。教室を見渡してみると、数人で話しているグループがいくつかありました。隣に座っている人(同性)をみると、その人もあなたと同じように1人であるようでした」である。この人物に対して、“話しかける”か“話しかけない”かの選択を求めた。“話しかける”を選択した場合には、その理由(動機)を尋ねた。動機については、Gable(2006)を参考に、接近動機(「色々な人と親しくなりたいから」など4項目)と回避動機(「1人でいると恥ずかしいから」など4項目)にあたる項目を独自に作成した。各項目について、“あてはまらない”から“あてはまる”の5件法で回答を求めた。

結果

尺度構成

操作チェック項目について因子分析(最小二乗法)を行ったところ、1因子性が確認されたため(説明率42.31%)、「人から受け入れられた」と「人から認められた」の2項目を逆転したうえで、4項目の合計を拒絶感

得点とした( $\alpha=.72$ )。PANASについて、ポジティブ感情、ネガティブ感情ごとに $\alpha$ 係数を算出したところ、それぞれ.86、.83と一定の信頼性を有することが示されたため、各8項目の合計をポジティブ感情得点、ネガティブ感情得点とした。状態自尊感情尺度について、逆転処理を行ったうえで $\alpha$ 係数を算出したところ、.89と高い信頼性を有することが示されたため、9項目の合計得点を自尊心得点とした。

関係形成行動について、“話しかける”としたものは110名、“話しかけない”としたものは32名であった。“話しかける”とした110名の回答をもとに、動機を尋ねる項目に対して因子分析(最小二乗法)を行ったところ、固有値1以上の2因子が抽出された。第1因子には、「色々な人と親しくなりたいから」「人と話すのは楽しいから」などの負荷量が高かったため、「接近動機」因子とした。第2因子には、「1人でいると恥ずかしいから」「寂しさを紛らわせたいから」などの負荷量が高かったため、「回避動機」因子とした。各因子に負荷の高い4項目の合計得点を接近動機得点( $\alpha=.82$ )、回避動機得点( $\alpha=.80$ )とした。

条件間の差

条件ごとの各変数の得点をTable 1に示す。順位付け課題の操作の有効性を検討するために、拒絶感得点に対して1要因分散分析を行った。しかし、条件間で有意な差はみられなかった( $F(3,138)=1.59, n.s.$ )。同様に、ポジティブ感情得点( $F(3,138)<1, n.s.$ )とネガティブ感情得点( $F(3,138)=1.05, n.s.$ )、自尊心得点( $F(3,138)<1, n.s.$ )についても条件間で有意な差はみられなかった。

関係形成行動について、条件ごとに“話しかける”を選択したものの割合を算出したところ、受容条件が69.44%、肯定的出来事条件が72.22%、拒絶条件が88.57%、否定的出来事条件が80.00%であった。条件と関係形成行動との偏りは有意ではなかった( $\chi^2(3)=4.50, n.s.$ )。また、接近動機得点と回避動機得点に対して1要因分散分析を行った。しかし、いずれも条件間で有意な

Table 1 条件ごとの各変数の得点

	受容		肯定的出来事		拒絶		否定的出来事		F値	$\eta^2$
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD		
拒絶感	11.36	3.47	11.14	2.75	10.40	2.79	11.86	2.21	1.59	0.03
接近動機	16.48	2.69	15.85	3.62	16.71	2.77	16.18	3.20	0.41	0.01
回避動機	13.52	3.16	13.50	3.17	12.55	4.03	12.61	3.94	0.60	0.02
ポジティブ感情	27.81	8.05	27.39	5.53	27.89	6.63	27.97	5.64	0.06	0.00
ネガティブ感情	24.00	8.28	21.39	5.73	22.14	5.55	22.97	6.31	1.05	0.02
自尊心	34.25	7.45	34.17	6.87	36.11	7.57	36.20	7.79	0.82	0.02

Table 2 各変数間の相関係数

	1	2	3	4	5	6	7
1. 性別							
2. 拒絶感	-.23 **						
3. 関係形成行動	.25 **	-.21 *					
4. 接近動機	.25 **	-.30 **	—				
5. 回避動機	.19 *	.04	—	.25 **			
6. ポジティブ感情	.01	-.47 **	.19 *	.28 **	-.08		
7. ネガティブ感情	-.12	.47 **	.05	-.10	.18	-.23 **	
8. 自尊心	.04	-.61 **	.27 **	.23 *	-.04	.70 **	-.43 **

注) 性別に関しては、男性=0、女性=1とした。関係形成行動に関しては、“話しかけない”=0、“話しかける”=1とした。

\* $p<.05$ , \*\* $p<.01$

差はみられなかった ( $F(3,106)<1, n.s.$ )。

#### 変数間の関連

本研究で扱ったすべての変数について、条件間で有意な差がみられなかった。そこで、分析の視点を変え、変数間の関連について検討することとした。まず、各変数間の相関係数を算出した (Table 2)。性別については、男性を0、女性を1とした。関係形成行動については、“話しかけない”を0、“話しかける”を1とした。ソシオメーター理論からの予測と一致し、拒絶感得点は自尊心と負の関連を示した ( $r=-.61, p<.01$ )。しかし、予想に反して、拒絶感得点は関係形成行動と負の関連を示した ( $r=-.21, p<.05$ )。また、拒絶感得点は、接近動機得点と負の関連を示した ( $r=-.30, p<.01$ )。自尊心得点は、関係形成行動 ( $r=.27, p<.01$ ) や接近動機得点 ( $r=.23, p<.01$ ) と正の関連を示した。

相関係数の値を踏まえて、拒絶感が自尊心を低下させることで関係形成行動を抑制するというプロセスを想定し、重回帰分析およびロジスティック回帰分析を用いて検討した。自尊心得点に対して、性別、ポジティブ感情得点、ネガティブ感情得点、拒絶感得点を説明変数とする重回帰分析を行った。その結果、説明率は有意であり ( $R^2=.62, p<.01$ )、性別 ( $\beta=-.06, n.s.$ )、ポジティブ感情得点 ( $\beta=.52, p<.01$ )、ネガティブ感情得点 ( $\beta=-.18, p<.01$ ) の影響を統制したうえでも、拒絶感得点が有意な負の関連を示した ( $\beta=-.29, p<.01$ )。関係形成行動に対して、性別、ポジティブ感情得点、ネガティブ感情得点、拒絶感得点、自尊心得点を説明変数とするロジスティック回帰分析を行った。Hosmer-Lemeshow検定の結果、モデルは適合していた ( $\chi^2(8)=7.70, n.s.$ )。的中率は80.28%であり、性別 ( $\beta=1.36, p<.01$ )、ポジティブ感情得点 ( $\beta=.00, n.s.$ )、ネガティブ感情得点 ( $\beta=.05, n.s.$ )、拒絶感得点 ( $\beta=-.02, n.s.$ ) の影響を統制したう

えで、自尊心得点が有意な正の関連を示した ( $\beta=.11, p<.05$ )。

#### 考察

本研究では、他者からの拒絶が自尊心の低下を介して関係形成行動を促すプロセスを想定し、その際の動機を弁別したうえで検討することを試みた。受容—拒絶の操作には、プライミングによる方法を用いた。しかし、操作チェック項目に関して条件間で差がみられず、本研究における実験操作は失敗であったといえる。

本研究で採用したプライミングによる方法が失敗した理由としては、次の2つが考えられる。1つ目は、実験刺激に対する参加者の関与の低さである。実験操作の順位付け課題で用いた出来事は、いずれも一般的な出来事として提示した。それらの出来事は、多くの大学生が経験し得るものであると考えられるが、実際に経験したことがないために、その際の心理状態を想像することが容易ではなかったかもしれない。そのため、出来事に順位を付ける段階で課題への関与が低くなり、効果がみられなかった可能性がある。講義時間中に一斉に実施したという方法論上の特徴も関与の低さに寄与していると考えられる。

2つ目は、受容—拒絶に関して、プライミングによって逆の心理状態が喚起された参加者がいた可能性である。例えば、拒絶条件において、現時点で対人関係に満足しており、あまり拒絶を経験したことがない参加者は、拒絶という架空の出来事を提示されたことで、現在の良好な対人関係を想起し、受容条件と同様の心理状態になった可能性がある。受容条件でもこれと逆の状態を示す参加者がいたとすれば、全体的には受容条件と拒絶条件で差がみられないことになる。ただし、この解釈は肯定的出来事条件や否定的出来事条件との差がみられな

かったことを説明できない。

以上のような限界を認めたとうえで、変数間の相関関係から、本研究で想定したプロセスについて考察する。操作チェックとして測定した拒絶感と自尊心との間には負の関連がみられた。この関連は感情状態の影響を統制したうえでみられた。これは、質問紙回答時点で拒絶感が高いほど自尊心が低いことを示しており、ソシオメーター理論の予測と一致するものである。実験操作によって拒絶感が高まらなかったもの、日常的に拒絶感を感じている程度には個人差があり、それに伴って自尊心も変動していると考えられる。

一方で、自尊心と関係形成行動との間には正の相関がみられ、感情状態や拒絶感の影響を統制したうえで自尊心の高さが関係形成行動の生起を予測した。この結果は、自尊心が高いほど初対面の他者に対して話しかけやすい傾向があることを示しており、本研究で想定したプロセスと逆の結果である。Baumeister, Tice, & Hutton (1989) は、特性的自尊心の高いものは、自己高揚を志向して報酬的な社会的関係を求める一方で、特性的自尊心の低いものは、対人場面において自己保護的な方略をとりやすいとしている。また、Leary et al. (1995) は、特性的自尊心の高さは、以前に他者から受容あるいは拒絶されてきた程度を反映するとしている。本研究では、受容—拒絶の操作が機能していなかったため、状態的自尊心として測定した自尊心は、特性的自尊心を反映している可能性が高い。そうであれば、自尊心の高いものは、他者から拒絶される可能性を低く見積もり、新たな他者との関係を報酬的なものとみなすことで、初対面の他者に対して積極的に働きかけると考えられる。逆に、自尊心の低いものは、他者から拒絶される可能性を高く見積もり、他者に働きかけないことでさらに自尊心が低下する危険性を回避していると考えられる。

結果を総合すると、拒絶感の高いものは、自尊心が低いために関係形成行動を起こさないと考えることができる。これは、拒絶が関係形成を促すことを示した先行研究 (Maner et al., 2007; Williams et al., 2000) に反するものである。この不一致は、実験操作による拒絶であるか、日常的に感じている拒絶感であるかの違いに起因すると考えられる。実験場面での拒絶は、状態的に喚起されたものであって恒常的なものではないため、人は拒絶に対する対処可能性を比較的高く認知しており、関係形成行動によって対処しようとする。一方、日常から恒常的に拒絶感を経験しているものは、拒絶的な出来事に対する対処可能性を低く認知しており、関係形成行動が成功する見込みを低く捉えていると考えられる。Levy, Ayduk, & Downey (2001) は、日常に拒絶を多く経験した場合

には、拒絶されるであろうという期待を形成し、関係から退却するという対処方略を用いることを指摘している。実験場面における拒絶と日常に感じている拒絶感では、対処可能性という点で異なっており、その違いによって結果の不一致が生じたと考えられる。

関係形成行動の際の動機について、拒絶感は接近動機と負の相関を示し、自尊心は接近動機と正の相関を示した。拒絶感が高いものは、全般的に関係形成行動を起こさない傾向にあるもの、仮に自ら他者に働きかけた場合にも、その動機は他者との関係を楽しもうとするような接近動機ではないと考えられる。しかし、拒絶感と回避動機との間には関連がみられなかったため、必ずしも否定的な結果を避けるために他者に働きかけるというわけではない。接近—回避以外の視点から動機を捉え、拒絶感が関係形成行動を促す場合の動機についてさらに検討する必要がある。

本研究では、拒絶の操作が失敗したため、関係形成行動やその際の動機に対して拒絶が及ぼす影響を十分に検討することができなかった。拒絶の操作方法を改良することが最優先の課題である。そのうえで、本研究で示唆されたように、拒絶が関係形成行動に及ぼす影響と、その際に自尊心が果たす役割についてさらに検討する必要がある。

## 引用文献

- 阿部美帆・今野裕之 (2007). 状態自尊感情尺度の開発  
パーソナリティ研究, 16, 36-46.
- Baumeister, R. F., Tice, D. M., & Hutton, D. G. (1989). Self-presentational motivations and personality. *Journal of Personality*, 57, 547-579.
- Elliot, A. J., Gable, S. L., & Mapes, R. R. (2006). Approach and avoidance motivation in the social domain. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 32, 378-391.
- Frank, E., & Brandstätter, V. (2002). Approach versus avoidance different types of commitment in intimate relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 82, 208-221.
- Gable, S. L. (2006). Approach and avoidance social motives and goals. *Journal of Personality*, 74, 175-222.
- Gable, S. L., & Strachman, A. (2007). Approaching social rewards and avoiding social punishments: Appetitive and aversive social motivation. In J. Y. Shah & W. L. Gardner (Eds.), *Handbook of Motivational Science*. New York: Guilford Press. pp.561-

575.

- Gardner, W. L., Pickett, C. L., & Brewer, M. B. (2000). Social exclusion and selective memory: How the need to belong influences memory for social events. *Personality and Social Psychology*, 26, 486-496.
- Leary, M. R., & Baumeister, R. F. (2000). The nature and function of self-esteem: Sociometer theory. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology*, Vol. 32. New York: Academic Press. pp. 1-62.
- Leary, M. R., Tambor, E. S., Terdal, S. K., & Downs, D. L. (1995). Self-esteem as an interpersonal monitor: The sociometer hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 518-530.
- Levy, S. R., Ayduk, Ö., & Downey, G. (2001). The role of rejection sensitivity in people's relationships with significant others and valued social groups. In M. R. Leary (Ed.), *Interpersonal rejection*. New York: Oxford Press. pp. 251-289.
- Maner, J. K., DeWall, N., Baumeister, R. F., & Schaller, M. (2007). Does social exclusion motivate interpersonal reconnection?: Resolving the "porcupine problem." *Journal of Personality and Social Psychology*, 92, 42-55.
- 岡田 涼・中山留美子 (2008). 对人的拒絶研究の概観—実験社会心理学領域を中心に—名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), 55, 27-45.
- 佐藤 徳・安田朝子 (2001). 日本語版 PANAS の作成性格心理学研究, 9, 138-139.
- Sommer K. L., & Baumeister, R. F. (2002). Self-evaluation, persistence, and performance following implicit rejection: The role of trait self-esteem. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 28, 926-938.
- Srivastava, S., & Beer, J. S. (2005). How self-evaluations relate to being liked by others: Integrating sociometer and attachment perspectives. *Journal of Personality and Social Psychology*, 89, 966-977.
- Watson, D., Clark, L. A., & Tellegen, A. (1988). Development and validation of brief measure of positive and negative affect: The PANAS scales. *Journal of Personality and Social Psychology*, 54, 1063-1070.
- Williams, K. D., Cheung, C. K. T., & Choi, W. (2000). Cyberostracism: Effects of being ignored over the Internet. *Journal of Personality and Social Psychology*, 79, 748-762.

(2009年11月15日受稿)

ABSTRACT

Relationship-Formation Behaviors following Interpersonal Rejection

Ryo OKADA

The purpose of this study was to examine the process model in which interpersonal rejection increased relationship-formation behaviors through the decrease of self-esteem. Participants were 148 university students. They were randomly assigned to one of four conditions: acceptance, positive events, rejection, and negative events. Experimental conditions were induced by a priming of condition-relevant events. After the induction, they answered feeling of rejection, self-esteem, mood states, and decision-making in a relationship-formation situation. The results showed that the experimental manipulations failed and no variables were varied with conditions. However, the feeling of rejection predicted low self-esteem, which in turn predicted the relationship-formation behavior. This showed that interpersonal rejection undermined relationship-formation behaviors through lack of self-esteem. The findings are discussed in terms of negative effects of interpersonal rejection.

Key words: interpersonal rejection, relationship-formation behavior, self-esteem, sociometer theory